新社会人への君へ　私が贈る3カ条　5

「自活女子」を目指して

一、仕事は、老後までの「安全網」
一、働き続けることは結婚の早道
一、女性のお手本、職場で探して

白河桃子さん(53)

しらかわ・とうこ　1961年、東京生まれ。商社や外資系投資銀行などに勤務。その後、少子化問題を扱うジャーナリストに。著書に「『婚活』時代」「女子と就活」「『産む』と『働く』の教科書」（いずれも共著）など。2014年から相模女子大客員教授。

早坂元興撮影

――女性たちが社会に出るとき、心得ておいた方がいいことはなんでしょう。

「仕事には必ずしも崇高な理念や、やりがいがなくてもいいのです。自分の食いぶちを自分で稼ぐ『自活女子』になることを、まずは目指してください。働くことは、老後も含めた自分の人生に安全網を張ることなのです。『働くことは当たり前』と思ってほしい」

――多くの企業はまだ男性中心です。女性にとって壁もありますよね。

「深夜まで働くことが美徳とされたり、妊娠すると職場でお荷物扱いされたり。多くの日本企業には『仕事が何より尊い』という空気がある。男性中心の会社の理屈を知ることは社会を知ることです。まずは会社での作法を学び、仕事の土台をつくりましょう」

「でも、いつかは子どもがほしいと思うのであれば、会社の命令が一番大事という『会社教』の価値観に、どっぷりつかるのは危険です。働きながら子育てをする女性の先輩をよく観察してください」

□　□

――若い女性に専業主婦志向が強まっている、といわれています。

「厳しい雇用情勢の裏返しです。非正規雇用の広がり、長時間労働、厳しいノルマ、妊娠や出産した女性に対するマタニティー・ハラスメント……。『子育てとの両立なんて無理』と思うのは仕方がありません」

「でも妻子を養うのに十分な収入のある男性は、ほんの一部です。幸運なことに専業主婦になれても、夫がリストラされたり、体調を壊したりして働けなくなる心配もあります」

――大学卒業後は企業勤めをされていました。

「商社で3年、その後は外資系投資銀行などで計14年、事務系の仕事をしていました。商社のときは、男女雇用機会均等法も育児休業制度もまだないころです。女性は結婚したら辞めるルールがありました。私も『いつかは専業主婦になる』と思っていました」

――いつその思いが変わったのですか？

「外資系企業に移ったときです。妊娠中や子育て中の女性が働いていたのに驚きました。働き続けて自分でお金を稼ぐっていいな、と思うようになりました」

「36歳で結婚し、夫のジャカルタへの転勤を機に会社を辞めました。現地では中産階級の家庭の多くが家政婦やシッターを雇っていました。高学歴女性は働き、家事はしません。日本との違いに驚きました」

――今の活動につながっているのですね。

「20代のころから知り合いの女性誌編集者に頼まれ、結婚に関するエッセーを書いていました。ジャカルタでも執筆を続けました。2002年に帰国し、物書きに専念することにしました。私自身、子どもを産んでいればよかったなと思います。その思いから、子育てと仕事は両立できることを、若い女性たちに伝える活動を始めました」

□　□

――「婚活」や「妊活」という言葉を広めました。

「妊娠の知識をつけたり、体調を整えたりする『妊活』はとても大切です。覚えていて欲しいのは、働き続けることを土台にして、そのうえに結婚や出産があるということ。若い男性は収入の低い人が多く、女性の『養って』という願望は重たい。女性が働き続けると腹をくくれれば、結婚も出産もしやすくなります。結婚して辞めようと思うと、逆に結婚が遅れると思った方がいい」

――仕事と子育てを両立するポイントは？

「忙しい職場でなくても、特に女性の場合は、出産や子育てで仕事を猛烈にできるときと、できないときがある。両立している女性のお手本を社内で探してみましょう。緩急つけながら働き続ければ、きっと打開策が見つかるはずです」

「肝心なのは、パートナー選びです。女性も働くことが当然だと考える男性を選ぶのが基本です。さらに育児や家事もきちんとやる人がいい。『妻のキャリアも自分のキャリアと同じ価値がある』と男性には考えてもらいたいですね」

（高橋末菜）